

社長の経営哲学の構築にお役立ちする

ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

徹底した上質志向で躍進

1. 元気な名古屋で、ひとときわ輝いている外食産業がある。しゃぶしゃぶの「木曽路」だ。木曽路の平均単価は 4400 円。昼は 2500 円だが、夜は 6000～7000 円に達する。上場する全国チェーンの外食産業のうち、ここまで単価が高いのは木曽路をおいてない。1952 年設立だが、1990 年代初頭のバブル期までは、法人相手が主体だった。しかし、バブル崩壊とともにいち早く、個人や家族での利用主体に変えていく。それでも低価格化志向に走らず、あくまで個人客の「プチぜいたく」を満たすよう、演出し続けたのである。
2. だからチェーン店にありがちな、金太郎アメ的なメニューにはしない。旬の素材はほぼ 1 ヶ月おきに変更する。焼き物や煮物に使う魚や野菜は、その季節に一番おいしい素材を飽きがこないよう、頻繁に変える。サラダも毎月違う中味にするほどだ。むろんメインの牛肉には和牛をつかっているが、中でも A3～5 級で霜降りの多い、高級品のみを扱う。
3. 徹底した上質志向も飛躍の秘密だ。その最たるものが正社員重視だ。木曽路は 1 店舗当たり、正社員が平均 8 人はいる。常駐の正社員 8 人のうち、2 人はホール側の店長と接客長で、残り 6 人は何と調理師なのである。社内に 600 人近くも有しており、全従業員の約 1200 人中、半分が調理師なのだ。店舗ごとにプロの調理師集団を抱えているゆえ、魚や野菜は各店舗で一から調理できる。顧客のオーダーメイドの要望にも応えられる。他の全国チェーンのように、本部のセントラルキッチンで行った加工済みの素材で、店でマニュアルどおりに作る方法をとらないのだ。

(参考:「週刊東洋経済」2007 年 7 月 7 日号)

経営者のための理念・哲学

生き方を宮澤賢治に、暮らし方を良寛に
三輪 真純 (東光院住職)

1. 先人の足跡をいろいろと尋ねてきて辿り着いたのは、「生き方を宮澤賢治に、暮らし方を良寛に」ということです。良寛は自分を戒めるために「良寛戒語」といわれる細かな戒律をつくり、一生涯自らを律し続けた。良寛の魅力はやはり、人生をあるがままに生きたことだと思います。人にお説教もしなければ、書き残した本もない。お説教なんてする身分じゃないという考え方です。
2. 一方、宮澤賢治は人のために自分の一生を尽くしたという生き方です。彼の残した作品は皆そうです。「世界全体が幸福にならないかぎり、個人の幸福はありえない」という思想、人のためにやってあげるのではなく、やらせていただくという考え方。毎日毎日おかげさまで生きているのだから、そのご恩返しをするのが務めだという考え方です。良寛が「任運」であれば、賢治は努力して運命を切り開いていく「騰々」の生き方です。

(参考:「致知」:2007 年 9 月号)

経営者のための危機管理

あいさつのない会社が不祥事を起こす
佐藤 一義 (立正大学教授)

1. あいさつが少ない会社は、社員の倫理観が薄れ、不祥事が起きやすい体質になる。あいさつが減ると、コミュニケーションのきっかけがなくなり、情報交換が滞る。その結果、事務連絡や引き継ぎの「うっかりミス」が多発する。事態が悪化し、あいさつの際に声を出さず、会釈だけを交わすようになると、多くの社員はストレスを感じるようになる。こうした段階で横行するのが「意識的な手抜き」だ。マニュアル無視の作業や情報の漏洩、遅刻・欠勤などだ。
2. 会社に勤めていれば、誰でも会社や同僚に多少の不満を持つ。それらが放置されると、やがては故意に組織にダメージを与えようとする者が出てくる。具体的には、業務上横領や個人情報転売だ。ここに来て企業の不祥事が増えている。その背景には、会社の中のみならず、日本全体で挨拶がないがしろにされていることがあげられる。

(参考:「日経ベンチャー」2007 年 7 月号)

古典に学ぶ

性急な人を使うには

「人、或は性迫切にして事を担当するを好む者なり。之を駆使するはかえって難し。迫切なる者多くは執拗なり。全きを挙げて以て之を委すべからず。宜しく半ばを割きて以て之を任すべし」

(訳) せっかちな性格でなんでも一身に引き受けてやろうとする人がある。こういう人を使うのは却って難しい。それは片意地、剛情な人であるからだ。宜しく仕事全部を委せず、半分程度を担当させるがよい。

(参考:佐藤一斎「言志四録」:PHP文庫)